白山　　目附谷
2000年8月14日～15日　　石崎啓之、松原憲彦(北大山の会)

8月14日（曇り後時々雨）　美濃から油坂峠、越前大野経由で目附谷を目指す。悪天男石崎とのドライブは、やはり雨。しかし回復基調にあるはず。一里野温泉スキー場の先にゲートがあるも易々と突破し、林道白尾線を楽々と金山橋まで。下車すると、生まれて初めてのアブの洗礼を受ける。入渓地点での目附谷は取水のため水量少なく、大渓谷の風情は残念ながら、無い。しかし、明るく快活な印象を持って歩を進める。沢は難場も無く、淡々と流れる。唯一、標高870mの屈曲手前にチョックストーンの滝が有るが、ロープも出さずに通過できる。岩質に因るのだろう、これほどに歩き易い沢はかつて経験したことが無く、読図を疑う程に進む、進む。両岸は時折、思い出したように立ったりするが、地図で想像する程のものではない。アブの攻撃もあって殆ど休むこと無く歩き、３時間で場違いな取水堰堤着。標高1000mを越えるこの辺りからアブの姿も見えなくなった。本流がコエ、ナル、クラの三谷を合わせて東を向くと傾斜と岩が大きくなり、不意に大滝が現れる。30m程の直瀑だが、左岸が崩壊した様子で写真で見た趣とはいささか感じが異なる。ここで釣師の一群と会ったのだが、以前あれほど釣れたイワナがまるで居ないとこぼしていた。大滝は、右岸を軽く巻く。４m滝は左手を絶妙に登れ、カブト谷をナメ滝で合わせた先に両岸の立った二重滝登場。この地図上二つ目の滝印の「紅滝」については、下流の滝印の大滝に冠せられるべきでこれを地図の誤りと見る向きも有るが、そもそもこの「紅滝」は、「二重滝」が訛って「ニジン滝」と呼び習わされ、その当て字が「虹滝」とされ、誤植の結果「紅滝」と掲載されるに至ったとか。虹は掛かるかもしれんが、少なくとも岩は赤くはない。なんにしても奥の12m直瀑には手が出ず、明瞭な巻道に導かれる。これを越えた先の左手に鎮座する「子泣き岩」に笑い、雨も落ちてきたので標高1500mの河原でテントを張る。霧ションの下、酒飲んで、たっぷりと眠る。

8月15日（曇り後晴れ）　ツェルトを畳んで出るとじきに両岸いきり立つ。２m、４m滝は体慣らしに左手を登る。ひとたび両岸静まれど再び立ち（標高1530m）、右岸よりチョックストーンを抱えた鋭いルンゼを入れると本流には癖のある小滝が挟まり、１ポイント泳がされて滝に取り付く場面もある。この後断続的に雪渓が現れるが、時期的にはまだ早いようで対処に困る程の微妙なものは無い。くぐったり、乗ったりの対処が続く。壁の色は、灰白色から赤っぽく変化する。この周辺の両岸は雪国らしく、概ね傾斜のある草付き壁と言っていい。この頃より「赤壁」も確認出来ないほどのガスに巻かれて視界が効かず、こまめに読図をして進む。雪渓に埋もれずに出ていた目立った滝は、標高1920mと2100mの、谷が東に向きを変える所にある。前者は右手を直上するが、割に難しい。後者はどうとでも登れる。これを越えると一気に開け、それに呼応するかのように晴れ上がる。どうやら雲海の上に出たようだ。花咲く明朗な雰囲気に包まれて源頭を目指す。白いガレを越えると草原となり、七倉山と四塚山との鞍部に導かれて小径を左へ。四塚山はお花畑と平らな砂礫の広がる素晴らしい頂なので、是非一度訪れることをお勧めします。コーヒー淹れてると、七倉山の奥のガスが切れて大汝峰が現れた。さて、下りは七倉山北面の廃道を利用して正規の登山道に当て、岩間ヒュッテへの道を辿る３時間の歩き。林道終点には露天風呂(岩間温泉)があり、雨で冷えた体がみるみる溶ける。先客のおぢさんと仲良くなり、有り難いことに新岩間温泉から入渓地点まで送ってもらえた。多謝。（松原憲彦）RASHEEN.

タイム　8月14日　入渓9:00－三方谷出合10:40～11:00－取水堰堤12:00～12:30－大滝13:30～14:00－標高1500mＢＰ15:00／15日　出発7:00－小又出合8:00－四塚山11:30～13:00－岩間温泉着16:00

地図　白山　二ノ峰　加賀市ノ瀬　願教寺山

グレード　３級